

特集 本学会の「沖縄精神科医療委員会」活動の検証——50 年が経過して——

派遣医がみた当時の沖縄精神科医療の状況と活動

——そしてその後——

吉住 昭

沖縄への派遣医制度は、1964（昭和 39）年 1 月に開始し、1975（昭和 50）年 3 月に終了した。この派遣医制度は、後の東日本大震災の際の精神科医派遣の先鞭をつけたものとの見方もある。筆者の県立八重山病院への派遣は、わずか 4 ヶ月であったが、沖縄という異文化を体験し、さらには巡回診療への参加、駐在保健婦の存在など地域精神科医療・保健を目のあたりにしたことなど、診療の支援を行ったというより、むしろ学んだことのほうが大であった。沖縄派遣から約 30 年後、国立病院機構花巻病院へ赴任し東日本大震災を経験した。ここでの、支援を受けつつ支援するという体験についても述べた。

<索引用語：派遣医，異文化体験，地域精神保健，東日本大震災>

はじめに

日本精神神経学会の『「沖縄精神科医療委員会」活動の検証——50 年が経過して——』のシンポジストとして発表することとなった。当初、派遣医制度が始まった初期の様子を知る医師が報告の予定であったが、体調をくずされたこともあり、急遽派遣医として勤務した経験がある筆者がその体験を述べることとなった。また、シンポジスト間での事前の打ち合わせで、「この派遣医制度は後の東日本大震災の際の精神科医派遣の先鞭をつけたもの」との意見も出された。そのこともあり、以下県立八重山病院への派遣体験と、その後国立病院機構花巻病院の院長としての「派遣」体験、さらには東日本大震災を経験し、そのときの支援される側・支援する側の両方の体験もあわせて報告をする。

Ⅰ. 八重山病院精神科と派遣医制度

沖縄への派遣医制度は、1964（昭和 39）年 1 月

にスタートし、1975（昭和 50）年 3 月に終了した。厚生省医務局医事課の資料によると、その間八重山病院には、1969（昭和 44）年 11 月から翌年 2 月静岡県立養心荘の医師が政府立八重山病院へ派遣されたことに始まり、国立下総療養所から県立八重山病院への 1974（昭和 49）年 11 月から 1975（昭和 50）年 2 月までの派遣を最後に 21 人が派遣された。また上記の期間に、八重山病院の精神科は 1973（昭和 48）年 5 月に病棟が開設し、1974（昭和 49）年 2 月より 1 名の常勤医師が赴任していた。

Ⅱ. 八重山病院での体験

国立肥前療養所（現国立病院機構肥前精神医療センター）では、1966（昭和 41）年当時の政府立琉球精神病院（現国立病院機構琉球病院）への医師の派遣が始まり、その後石川保健所にも派遣が継続していた。当時の医局会で、派遣された医師より、「病院に入院している患者よりも、地域にい

る患者のほうがよく重症だ」と語られたことが、わずかに記憶に残っている。

筆者が八重山病院に派遣されたのは、国立肥前療養所に勤務していた医師が8ヵ月派遣された後の、1976（昭和51）年2～5月までのわずか4ヵ月間であった。そのときは、1974（昭和49）年に大学を卒業した後、ようやく医師としての経験が2年になろうとした時期でもあった。

自身の八重山病院への派遣は、沖縄への派遣医制度が開始されてから10年以上後のことで、しかも派遣医制度が終了したとされる1975（昭和50）年3月以後のことであった。車の右側通行は残っていたものの、1972（昭和47）年の本土復帰後ということで、先達の派遣の際はパスポートが必要であったということも過去のことであり、学会誌に掲載された沖縄精神科医療協力委員会、その後の沖縄精神科医療委員会での熱い議論も全く知る由もなかった。このように、時期的にも、さらには離島にある総合病院の精神科病棟という場所での勤務という点からも、いわば「特殊」な時と場所から沖縄の精神科医療のごく一部を体験したにすぎない。しかし、わずか4ヵ月の派遣医としての経験が、その後の臨床などにも大きな影響を与えたことは、疑う余地がないものであった。

1. 当時の八重山病院

当時の病院は、石垣市真栄里にあり、病院前にはサンゴ礁の海が広がっていた。一地区一公立病院であり隣接して保健所があった。1人の精神科常勤医が勤務し、50床で保護室は2床あり、30人以下の患者が入院しており、何よりもゆったりした時間が流れていた。その30人ほどの患者が入院している病棟では、病棟キャンプの際には全員が参加し、文字どおり病棟は空になった。2つある保護室は派遣期間中使用されることはなかった。手元には何度かの異動の際も処分しなかった黄ばんだ琉球政府と印刷された罫紙に手書きの字句で書かれた「県立八重山病院3病棟 八重山病院精神科のこれからとこれまで」と題されたコピー原稿がある。それによれば、病棟勤務者は医師2名、

看護婦7名、看護師6名、メイド2名とある。また往診、巡回診療、保健婦のことが書かれている。筆者にとっても往診、巡回診療、保健婦との出会いは貴重な体験であり、まずそこから始めようと思う。

2. 派遣医としての体験

それまで自分が生活する地域の歴史などを念頭においたことはまずなかった。八重山では職員からさまざまな歴史とそこでの生活苦を教えられた。ある看護婦が台風が接近、上陸すると飴玉一つ残らなかったとの離島苦（シマチャビ、島痛び）を語ってくれた。またあるときは当時勤務していた看護師に郷里西表西部網取に連れていってもらった。その海はあくまでも青く、熱帯の樹がその青い海に映り、あるのは集団移住後の集落跡の静寂とうっそうと茂る熱帯樹のみであった。そしてその看護師が口にしたマラリアのことや、「現金はなかったけど豊かな生活だった」と語った言葉が思い出される。

自身、歴史と文化ということをはじめて考えるに至った。そしてその地で行われている保健・医療でも医師不足から代用医師としての医介輔や駐在保健婦の存在も初めて知ることになった。

駐在保健婦の存在を間近に知るに至ったのは、離島への巡回診療であった。巡回診療とは、当時は八重山病院の医師と看護婦がチームを作り、離島に出向きその地の保健婦とともに自宅を訪問し、診察とともに、あらかじめ処方されている薬剤を渡すというものである。離島からの受診は費用など多大な負担があり、この制度が始まったのであろう。神戸大学から約9年八重山病院で勤務した葛山³⁾や同じく約5年勤務した田中⁴⁾のまとめによると巡回診療は、1967（昭和42）年宮古病院から八重山への巡回診療がその始まりであり、八重山から離島への巡回診療は、八重山病院に病棟ができた翌年の1974（昭和49）年に始まった。筆者は、波照間、与那国、西表東部の巡回診療を経験した。驚いたことに、当時はその地の方言しか話せない人もあり、離島方言、ウチナーグチ（沖

縄方言)、ヤマト言葉(標準語)という順に言葉を介して、派遣医に届くこともあった。今よりははるかに離島から沖縄本島を経て本土までの距離は遠かった。そこでの駐在保健婦は本当に隅から隅まで住民のことを知っていて、また住民の信頼も絶大なものがあった。与那国の保健婦は、島での差別はハンセン病のほうが大きかったこと、西表の保健婦は助産婦の資格も取得しており、島にいる若い住民全ての分娩に立ち会ったことなど語ってくれた。これらの言葉は、おぼろげに浮かぶ彼の地の風景とともに、いまだ自分の中に残っている。おそらくは、病院がなく精神科の医師もいない地域での地域精神保健の実践がそこにはあったであろうし、巡回診療を行う医師の側にもその実践を邪魔しない、まずは当地の保健婦の活動を尊重するとともに、その意向に沿うという構えもあったのであろう。

文化や歴史と精神科という点では、この地で特有の憑き物カミダリー(神憑き)という病態も経験することがあった。この患者は離島出身でユタの家系とのことで、方言で話すためもちろんその内容は理解できなかったが、何かが憑いているような言動、表情は、短い経験とはいえ、本土では全く体験したこともない病像であった。筆者が派遣された当時は、現在では死語ともいえる文化と精神医学などとの関係も語られていたときであり、沖縄に派遣された経験をもつ久場の憑依状態に関する文献²⁾や吉田禎吾の「日本の憑きもの」⁵⁾などの書籍も後に手にした。

病棟の診察室からは、来る日も来る日も銀ねむの木を眺めながら、緩やかな時間が通り過ぎていった。わずか4ヵ月の体験であったが、地域保健をそして文化と精神科を経験したことは何よりも得難い経験であった。その意味で、八重山への派遣は、派遣されて何か役に立てたかというより、この派遣体験は自身が学べたことのほうが大きく、自分の中での財産となった。

Ⅲ. 東北への「派遣」そして震災

1. 花巻病院への派遣⁶⁾

八重山病院への派遣後約30年が経過し、2007(平成19)年5月から2012(平成24)年3月まで約5年間、それまで長期にわたり在院していた九州の肥前精神医療センターから花巻病院へ院長として赴任した。赴任時には花巻病院での勤務期間は決まっていなかったが、いずれは九州へ戻る予定であり、こじつけのようではあるが、今から考えると期間未定の派遣医としてあったようにも思える。八重山病院への派遣はもともと医師がいなくてのところへの派遣であったが、花巻病院の場合医師は充足していたものの退職が相次ぎ、その結果医師不足が起こった病院への派遣ともいえる。花巻病院の医師数の変化をみると、赴任前の10年間で、医師数は約半数に、指定医は3分の1までに落ち込んだ。また赴任した翌年の2008(平成20)年11月には常勤医師4名、うち指定医に至っては2名となるなど事態が好転する兆しはみられなかった。花巻病院は、医療観察法病棟、重度心身障害者病棟をもち、岩手県中部の基幹病院としての役目も担っており、当然上記の人員では病院機能を担うことは困難であった。そのため国立病院機構や精神神経センター病院より支援を受けることとなり、各病院から1~2週間交代で支援医師が診療にあたることとなった。在任中には、肥前精神医療センターより6名のレジデントが3名ずつ交代で各々6ヵ月勤務してくれ一息ついたこともあった。自身は派遣され、かつ派遣を受けるという奇妙な日々が続いたことになる。

八重山での卒後2年目の経験と、それから30年後の花巻病院での院長としての経験とは、立ち位置の違いはあるが、八重山でと同様に、東北という風土の中で、患者・家族の優しさや病棟の静けさを含め、また異なった文化を体験することにもなった。

2. そして大震災——支援を受ける側と支援する側——

2011(平成23)年3月11日に大震災が東日本

を襲った。医療という側面からみると、もともと人員を含む医療資源の少ないところが直撃された。震災直後の花巻病院の動きについてはすでに別に報告をした⁷⁾。国立病院機構からの支援は、震災直後からの医薬品の補給に始まり、医師の支援と多くの援助を受けることになった。また、震災直後の寒さと余震が続く中で、支援してくれる医師が傍らにただいてくれるというだけでも安心感を感じることができた。

一方花巻病院は、岩手県中部圏域の精神科の拠点病院であり、沿岸地区は釜石まで及ぶ中部圏域の震災後支援も大きな課題としてあった。しかし、支援を開始しようにも自身の病院の医師が不足し、あるいは釜石までは雪の峠を越えて沿岸まで 100 km に及ぶという広大な圏域があるなど、課題は山積みであった。幸い 2011 (平成 23) 年 10 月から 8 ヶ月間震災支援ということで 1 名の医師が花巻病院に着任することになった。ようやく体制が整い、常勤医、支援医師、コメディカルスタッフ (精神保健福祉士、臨床心理士、作業療法士、看護師)、事務職員によるチームを作り、まず琉球病院などが支援を行っていた宮古地区への支援を皮切りに、2012 (平成 24) 年 4 月からは支援医師 1 名とコメディカルスタッフ 1 名の 2 名が、毎週 1 泊 2 日で釜石保健所を拠点に活動を行った¹⁾。ここでは、当地にいる支援者にかえって負担をかける外部からの支援組織の存在、そのために生じた支援組織への警戒心もあった。そのために、支援の際、①保健師をサポートするために来ている (支援者支援)、②保健師がしてほしいことをする、③被災者を直接支援しなくともよい、④邪魔にならないよう活動することを原則とし、地域の方には高い評価をいただいた。

状況は全く違うものの、八重山地区への巡回診療は、まず医師の定着があった宮古病院によって開始され、その後八重山の離島への巡回診療も八重山病院の体制がある程度はかられることによって担われてきた。花巻病院から沿岸部への定期的な支援も、医師の派遣とそれなりの充足を待って、活動を行うことができた。場所と時代は変わ

れども、その活動の両者にいくばくかでも参加できたことに何やら因縁めいたことも感じざるを得ない。さらには、八重山病院での巡回診療で駐在保健婦から多くのことを学んだが、今回の釜石地区の活動でも保健師活動の底力を知るとともに、地域においては保健師の活動を支援するという姿勢の重要性を再度認識することともなった。

おわりに

約 40 年前の卒後 2 年目の八重山体験、そしてそれから 30 年を経ての花巻での体験。八重山へ派遣されたことに始まり、その後の花巻病院では支援したり支援されたりと、まさに糾える縄のごとき体験であったように思える。そして、その両方の地で時と場所は違えども、貴重な体験をさせてもらった。さらには、患者の示す病像においても多くの経験をすることができた。「沖縄への派遣医制度は後の東日本大震災の際の支援へと続く」と、大先輩が口にしたことを、改めて自身の体験として思っていた。願わくば、若い医師が派遣・支援で各地に赴き貴重な体験をし、先達の沖縄派遣がその後の東日本大震災の支援・派遣につながったという見方があるように、次なる支援・派遣につながることを願ってやまない。

なお、本論文に関連して開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 堀田 洋, 阿部祐太, 石丸正吾ほか: 花巻病院における被災地支援報告. 精神医学, 57 (7); 567-571, 2015
- 2) 久場政博: 憑依症候群の精神病理学的ならびに社会文化精神医学的研究. 精神経誌, 75 (3); 169-186, 1973
- 3) 葛山秀則: 沖縄県立八重山病院精神科 (通称: ころ科) 紹介. 精神経誌, 108 (1); 102-105, 2006
- 4) 田中 究: 八重山諸島の精神保健—沖縄における精神保健福祉のあゆみ. 沖縄県精神保健福祉協会創立 55 周年記念誌 (北村毅編著). モリモト印刷, 東京, p.192-204, 2014
- 5) 吉田禎吾: 日本の憑きもの—社会人類学的考察. 中公新書, 東京, 1999
- 6) 吉住 昭: 精神科における医師不足 国公立病院

の立場から. 精神科, 13 (6); 491-495, 2008

考えてどう行動したか, そして現在の支援について—岩手

7) 吉住 昭, 堀田 洋, 阿部祐太: 震災直後, 何を

県から—, 病院・地域精神医学, 53 (1); 7-12, 2012

Medical Dispatch to Okinawa and following Period

Akira YOSHIKUNI

Midori-kai Yahatakousei Hospital

I was dispatched to Okinawa Ishigaki Island in 1976 and, then after about thirty years, to Tohoku to provide medical aid due to a shortage of psychiatrists. On Ishigaki, I participated in outreach activities for local islands and was deeply impressed by the public health nurses and community mental health services. I also recognized important points of view about culture and psychiatry. I spent five years in Tohoku and then the East Japan Disaster hit area. At that time, many psychiatrists from throughout Japan supported our hospital, and we supported the disaster area.

I describe my experiences in both places. I hope someday that young psychiatrists will join medical dispatch programs to such areas.

< Author's abstract >

< **Keywords** : medical dispatch, transcultural experience, community mental health, East Japan Disaster >